

『神祇秘鈔』註解(一)

中世神祇信仰研究会

はじめに

近時、中世の神祇信仰関係文献についての関心は確実に高まっている。新しい文献の発見・紹介や、未翻刻文献の活字化などが相次ぎ、本格的研究のための環境は整いつつあると言つてよい。しかし一方で、いつ・どこで・誰によって編まれたのかという基本的なことさえわかっていない文献も多い。最近の研究で明らかになりつつあるように、中世の神祇信仰に関する言説生成の中心的場であった伊勢には、度会・荒木田両門の神宮祠官はもちろん、園城寺・延暦寺・醍醐三寶院・西大寺等々、顕・密・律・禪にまたがった僧侶たちが入り込んでおり、そうした人々の間で情報の交換や資料の共有が行われていたと思われる。したがって、単純に書写者や伝授者、引用資料や用語をもって、安易に文献の成立や性格を断ずることはできない。結局、ひとつひとつの文献の内容を丁寧に読むことを積み重ねてゆくしか、これらの文献の性格や相互の関係を理解するための確実な方法はないということであろう。本稿は、そうした方法論に則り、中世神祇信仰文献のひとつである『神祇秘鈔』の註解を試みたものである。

『神祇秘鈔』は、すでに神道大系『真言神道(上)』^①と、真福寺善本叢刊『中世日本紀集』^②に活字化されている。後者には阿部泰郎氏による詳しい解題が附されているので、それを参考にして、まず『神祇秘鈔』なる文献について簡単に解説しておきたい。『神祇秘鈔』は、全三巻。序と全二十二条の本文からなり、各条は問答体で記されている。以下に全二十二条の標題を掲げる。(諸本により標題名に若干異同があり、真福寺本も目録と本文では標題名や配列が異なるので、ここでは真福寺本の本文中の標題にしたがった)

1 天地立相并神道等事・2 神名体事・3 神来降事・4 就神体其義繁多事・5 地神第一尊欲界天主元初事・6 御鎮坐事・8 神号分別事・7 大神宮秘所事・9 神所变事・10 神之天上天下事(以上上巻)、11 日本神生国事・12 神仏本迹事・13 依神明法楽顕善悪二边事・14 大神宮忌僧尼等事・15 大神宮求聞持相応事・16 神者为不生理又三千界主事(以上中巻)、17 神道与密教一致事・18 大神宮宰两部事・19 神以水火示不二事・20 天照神与大日本迹事・21 大神宮仕狐狼事・22 大師与天照神一体事(以上下巻)

これらの問答の内容をひとことでは言え、伊勢神宮の祭神や祭祀に関わるテーマを取りあげて、教理的解釈をくわえたものである。掲げられた標題名を見ればわかるとおり、関心は大神宮および天照神に集中しており、それを序文に「法身天照之全体、神道密教之不離、以_二無念之智悟_レ之、以_二不二之理示_レ之」とあるように、密教的論理をもって解説したものといえる。その意味では、いわゆる「両部神道書」の範疇に入ると言つてよい。ただし、本稿をお読みいただければわかるように、条目ごとに所説の内容や依拠する立場にはらつきがあり、終始一貫した構想の元に著されたものではないらしい。やはり阿部氏が指摘するように、伝授・口決の筆録を原型とすると見るべきであろう。冒頭述べたように、様々な言説の交錯する場が生み出した神祇信仰文献の典型と言えるかもしれない。

『神祇秘鈔』の成立時期については未だ明らかでない。写本の中では、真福寺善本叢刊の底本である真福寺本が南北朝期後半の書写、神道大系の底本である高野山持明院本が応永年間の書写とされるのが、比較的古いものである。いまはとりあえず、南北朝期の成立か、としておく。作者については、蓬左文庫本等の巻末に「此書石山内供淳祐御作明鏡也」と見えるが、もとより仮託である。また真福寺本奥書には「此書者、或僧(号俊融)所記也」と見えるが、「俊融」がいかなる人物であるかは未詳である。すでに伊藤聡氏が指摘したように^⑤、蓬左文庫本等の奥書には「此抄者於仁和寺相承」と見え、仁和寺流に伝承した可能性は高いが、果たしてその成立にまで関わるものであるのかは定かではない。今のところ先に挙げた阿部氏と伊藤氏の他に、『神祇秘鈔』の成立や性格について触れたものはなく、先行研究と呼べるようなものはないのが現状である。

次に諸本について簡単に触れておきたい。神道大系は高野山三宝院文庫本を底本として使用したとしているが、阿部氏は同大系は高野山持明院蔵本に依るとして、どちらかに錯誤があると思われる。また阿部氏は真福寺本と上記の高野山の二本の他に、国学院大学智恵光院旧蔵本・同河野文庫本・蓬左文庫本を紹介している。この他に、かつて「中世神道書を読む会」^⑥が確認した諸本には以下のようなものがある。

- ・天理図書館吉田文庫蔵『神祇秘鈔』 享保十三年写
- ・天理図書館吉田文庫蔵『神祇秘鈔』 書写年次不明
- ・京都大学付属図書館菊亭家旧蔵『神祇秘鈔』 本奥永禄八年
- ・京都大学付属図書館清家文庫蔵『神祇秘鈔』 天正十三年写
- ・東寺宝菩提院蔵『神祇秘鈔』 宝永元年写

- ・東寺宝菩提院蔵『神祇秘鈔』 享保十四年写
- ・大和文華館鈴鹿文庫蔵『神祇秘鈔』 書写年次不明
- ・東北大学狩野文庫蔵『神祇秘抄』 書写年次不明

このうち宝菩提院 宝永元年写 本は、最後の宝永元年の書写奥を除いて蓬左文庫本と同じ「康正三年 天正十八年 慶長十二年」の奥書を持つ。阿部氏が紹介する国学院大学智恵光院旧蔵本も、これと同系統である。また京大菊亭家本も「淳祐作」、「仁和寺相承」と記す点が共通し、これらと同系統と思われる。宝菩提院蔵 享保十四年写 本は「淳祐作」を記さないが、「仁和寺相承」と康正三年の奥書がやはり蓬左文庫と共通する。これら五本は同系統と見てよいだろう。また鈴鹿文庫・吉田文庫 年次不明 の両本は非常に近い関係にあると思われる、ともに奥書はないが「淳祐作」とする点は蓬左文庫本等と同様である。一方、吉田文庫 享保十三年写 本と京大清家本は、奥書に「俊融記」とする点で、真福寺本と同系統と思われる。狩野文庫本は零本であり、由来は不明である。このほか、石井行雄氏が智積院智山書庫蔵の『神祇秘抄』一本を紹介しているが^⑦、「石山内供淳祐作」と康正三年の奥書を持つところから、やはり蓬左文庫と同系統に属する本と見られる。以上を整理すると、次のようになる。

A系 (真福寺本・吉田 享保十三年 本・京大清家本)

A系? (持明院本・狩野文庫本)

B系 (蓬左本・宝菩提院 宝永元年 本・宝菩提院 享保十四年 本・京大菊亭本・国学院智恵光院本・智積院本)

B系? 「鈴鹿本・吉田 年次不明 本」

これら諸本の伝来について、いくつか気づいた点を述べておく。まず「淳祐作・仁和寺相承」とするもの(B系)と「俊融記」とするもの(A系)は、はっきりと分かれており、「俊融」を編者とする説は、仁和寺流とは別のところで生じたのであろう。さらに、蓬左文庫・宝菩提院 宝永元年写・京大菊亭三本の奥書からは、本書が東大寺に伝来したことが窺えるが、詳しいことはわからない。また、江戸初期の成立かと思われる『御流神道口決』⁵⁶なる本には、『麗氣記』、「神道五部書」や吉田系の神道書と並んで『神祇秘鈔』が引かれている。同書は智積院において伝授されていたことが奥書によって知れ、智積院本の存在とともに智積院との関係を窺わせるものである。

最後に、書名についてひとこと説明しておきたい。神道大系・真福寺善本叢刊はいずれも『神祇秘抄』とし、諸研究もそれに従っている。しかし諸本を見るに、外題・内題ともに「抄」とするものは持明院本と吉田 享保十三年 本・京大清家本、外題のみ「抄」とするのが真福寺本・狩野本であり、多数派のB系の諸本はすべて外題・内題ともに「鈔」の字を用いている。そこで本稿では書名を『神祇秘鈔』で統一した。(門屋記)

(二) 神道大系 論説編一 『真言神道(上)』(和多秀乗校注) 一九九三、神道大系編纂会

(三) 国文学研究資料館編 真福寺善本叢刊7 『中世日本紀集』 一九九九、臨川書店

(四) 伊藤聡「中世日本紀二題」、『むろまち』1、一九九二の註。また伊藤は「仁和寺資料【神道篇】神道灌頂印信」解題(『名古屋大学比較人文学研究年報 第二集』、二〇〇〇)においても、『神祇秘抄』についてふれている。

(五) 早稲田大学の大学院生であった伊藤聡・門屋温・中田徹・原克昭・渡辺匡一による研究会。諸本の収集は同研究会による。

(六) 石井行雄「智積院所蔵の国語国文学関係の善本一班」、『智山学報』36・37、一九八七・八九

(七) 福島県いわき市宝聚院蔵。同院では福島県地域文化研究会による聖教の悉皆調査が進行中である。『御流神道口決』の翻刻・紹介も、いずれ同研究会によって行われる予定である。